

1. 特に効果的であり改善に資した事例

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

特に効果的であり改善に資した事例について

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

《人社系》

●横浜国立大学国際社会科学部国際開発専攻

「貿易と開発に関わる専門人材養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・ジュネーブ大学のサマースクールに学生を派遣して WTO に関わる先端的な議論に触れる機会を提供したほか、本学の交流協定校であるベルン大学の世界貿易研究所において開催されたワークショップに学生を派遣して報告を行わせた。
- ・台湾で行われた WTO 模擬法廷のアジア地区予選に参加した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

本学の交流協定校であるベルン大学の世界貿易研究所を拠点に貿易と開発に関する先進的教育を行うことを平成 20 年度から開始するとしていた。そのため、平成 19 年度においては、その方法と可能性について本学と相手方の教員間でメールを介して検討作業を行ったほか、実際に学生 1 人を現地に派遣して貿易と開発の先端分野を研究する学生の視点から相手方と交渉を行わせ、平成 20 年 11 月に現地で学生主体のワークショップを実施する方向で話をまとめさせた。

- ・模擬法廷派遣に関しては、参加前に約 3 ヶ月をかけて関係教員（米国人および豪州人教員を含む）の指導下で起案したり、戦略的なディベート方法について特訓したりした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

台湾での WTO 模擬法廷アジア地区予選への参加については、その準備過程および現地での試合をとおして、WTO および国際法に関わる基礎的知識の向上が図られたのに加え、実際の WTO 紛争解決手続での言葉づかいやマナーについても習得した。事前にディベート等の訓練をしたこともあって、参加学生が「予選における最優秀弁論賞」、「準決勝における最優秀弁論賞」、「最優秀申立国意見書賞」、「最優秀総合意見書賞」を獲得するとともに、2009 年 5 月に開催された WTO 模擬法廷決勝ラウンドに進出した。

●大阪市立大学文学部研究科

「国際発信力育成インターナショナルスクール」の事例

(具体的に何を実施したのか)

インターナショナルスクール集中科目に毎年 3 名の外国人研究者を招聘し、英語で講義を行っていただいた。インターナショナルスクール集中講義で外国語によって発表した大学院生を中心に補助金交付期間内の 3 年間にのべ 32 名を海外に派遣し、国際学会での発表

1. 特に効果的であり改善に資した事例

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

等を奨励した。また、イリノイ大学の大学院生1名をインターナショナルスクールに招聘するとともに、アメリカ、タイ、インドネシア、カナダ等に教員を派遣し、大学部局間研究交流の基盤を築いた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

インターナショナルスクール集中科目では、英語による講義に同時通訳をつけ、聴講する学生の裾野を広げた。また年に1度の講義にとどめず、「インターナショナルスクール日常化プログラム」を模索した。補助金期間終了後も研究交流ネットワークが継続していくように組織と組織の研究交流となるように工夫した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

インターナショナルスクール集中科目を通じて、外国語による授業が「あたりまえ」という環境を作った。補助金期間に試験的に行っていた「インターナショナルスクール日常化プログラム」を平成22年度に制度化(予算化)し、数時間単位の外国語による大学院生・教員向けのセミナーを年間を通して行うようにした。大学院生の派遣についてはE-②参照。イリノイ大学、タイ・チュラロンコン大学から組織として毎年講師をインターナショナルスクール集中講義に派遣していただく提携を結んだ。タイ・チュラロンコン大学、インドネシア・国立ガジャマダ大学大学院/インドネシア国立芸術大学とは、現地で毎年アカデミックフォーラムを共催し、若手を含む研究者が研究交流をしている。平成23年3月には、イリノイ大学において、招聘した同大学大学院生もスタッフとなって国際研究フォーラムを主催する。

《理工農系》

●大阪大学基礎工学研究科物質創成専攻

「継続的交換留学制度の構築に基づく人材育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

海外の有力大学研究所等への大学院学生の3ヶ月以内の短期派遣と、これらの組織からの大学院学生、留学生の短期受け入れ。これを活用した討論会、セミナーの自主開発など自発的研究力啓発教育の充実。さらに派遣留学システムを組織的、包括的に進めることによる、教員の経験に強度依存しない研究科としての派遣受け入れシステムやそのためのノウハウ、インテリジェンスの確立。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

これまで多くの研究、教育プロジェクトにおいて、大学院生の海外派遣、受け入れはプロジェクトの目玉として取り上げられてきた。我が大学においても、多くの大型プロジェクトで、こうした取り組みがなされてきた。ところが、組織として戦略もなく、教授の個人チャンネル任せでこれを推進すれば、その教授は自分の研究室成果を大学の成果として

1. 特に効果的であり改善に資した事例

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

報告しプロジェクトは成功裏に終わるものの、後には何も残らない。その教授が、国際交流ノウハウを門外不出の秘伝として決して外部に語らないからである。まさに、放っておけば必ず 20 人程度の単位の利害でしか動くことができない日本民族の限界である。この教育プロジェクトでは、こうした単発打ち上げ花火におわり後には何も残らない大型プロジェクトと同じ運命には決して終わらせまいという、圧倒的決意の元に進められた。そのために大学院教育改革推進室の立ち上げと、全体掌握、情報の一元化などを行った。これと同時に、派遣受け入れを最大限に有効化するため、新科目導入や旧科目の改革、成績評価見直し、優秀賞授与などのシステム構築を行った。最終的にこうして蓄積したインテリジェンスとシステムを、次期プロジェクトへ継承することの重要性を表明し続け、以下に述べるようにそれを達成した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

海外留学や留学生を交えた自主開催セミナー、英語プレゼンテーション、成績厳密評価と成績優秀賞授与など、新しい教育システムが定着した。またそれらを通じた、競争原理と自発的研究力啓発に基づく重層的な取り組みによって、大きな教育効果が得られた。さらに、問 1 - 3 で論じたこれらの教育効果の継続性に関して、基礎工学研究科において国際交流推進室が設置され、教員、学生の派遣受け入れを含めた総合的取り組みが継承された。さらに「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」「国際化拠点整備事業(グローバル 30)」「大学院 GP」などの大型教育プログラムが研究科であいついで採択され、さらなる取り組みが継続できる基盤の獲得に成功した。

●九州工業大学生命体工学研究科生体機能専攻

「グローバル研究マインド強化教育プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・「国際マインド強化プログラム」において、交流協定校を中心に短期間の海外派遣を実施した。学生は実践的な英語の使用を通じて、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の修得を図った。
- ・派遣先はオーストラリア、マレーシア、シンガポール、タイ、スリランカ、アメリカ等でありプログラム実施期間中に 18 名の実績を得た。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

海外派遣に際しては、事前に指導教員と受け入れ先教員とで十分協議し、短期間でもスムーズな実施を心掛けた。学生に対しては事前にカウンセリングを行うなど海外でのトラブルを未然に防ぐように気を付けた。通信手段としてノート PC を携行させた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・派遣研究室での研究内容について口頭発表を行い、指導教員ならびに専攻教員が採点す

1. 特に効果的であり改善に資した事例

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

る方式の評価を行った。発表内容および質疑応答から、個人差はあるものの派遣前に比べて国際感覚の取得について一定の成果が認められた。さらに派遣前後の TOEIC スコアを比較したところ、平均してスコアの上昇が認められた。

- ・興味深い傾向として、書き取り能力には大きな変化がないのに対して、聞き取り能力の顕著な上昇が認められる。1ヶ月間の滞在により、コミュニケーション（会話）に必要な聞き取り能力が向上したためと考えられる。

《医療系》

●自治医科大学医学研究科医科学専攻

「新時代の地域医療学を創る人材の包括的養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

平成21年6月2日～3日にモンゴルにおいて組織形態学に関するワークショップ「International Workshop on Immunohistochemistry at Ulanbator」を開催した。本学より学生を含む5名をモンゴル保健科学大学に派遣した。

ワークショップでは免疫組織化学に関する理論を講義し、その後その実践・演習を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

モンゴル国における研究環境を勘案した手法の指導を行った。

講義では同手法の科学的原理を示す模式図、手技の実際を示す写真、結果や応用例を示す顕微鏡写真を多用した。

また、演習を行うにあたり、教員のみならず当該手法に長けた技師を派遣し、より実践的な指導を行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

モンゴル国は医学・医療面において言わば発展途上にあると同時に、特殊な地域事情もかかえている。免疫組織化学は、今やあらゆる医学生物学の分野で研究手法として幅広く用いられている基礎的かつ必須な手法であるばかりでなく、疾患の病理学的診断に欠くことのできない手法でもあるが、当地では全く実践利用されていない現状があった。今回のワークショップの実施により、当地の研究者に当該手法の重要性、実現性を教授するとともに、演習により体験させることで、手技を習得させることができた。また、当地にあった手法を指導したことで、今後さらにモンゴル国内に普及させるための礎を築くことができた。

1. 特に効果的であり改善に資した事例

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

●昭和大学薬学研究科医療薬学専攻

「薬剤師の薬学的臨床研究能力養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

大学院生の国際的な活動の機会を作るために、海外の3大学(嶺南大学(韓国)、マハサラカム大学(タイ)、オルバニー薬科大学(アメリカ))と昭和大学薬学部とで学部間協定を結び、大学院生および教職員の交流を開始した。大学院GPの3年間で昭和大学から派遣したのは、嶺南大学へ大学院生7名、教員4名、マハサラカム大学へ大学院生2名、教職員3名、オルバニー薬科大学へ教員3名である。また、昭和大学に受け入れたのは、嶺南大学から大学院生2名、教員2名、マハサラカム大学から教員1名、オルバニー薬科大学から学生2名、教員1名である。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ①薬学部6年制移行を踏まえ、既に6年制の過程を実施している大学との協定も結べるように検討した。3大学のうち、マハサラカム大学とオルバニー薬科大学は既に6年制教育を行っている。
- ②短期間の派遣・受入れであっても、大学院生・学生同士の交流機会をできるだけ持てるようにすることと、目的意識を持った訪問となるように、大学院生主体の合同セミナーを開催し、英語でのプレゼンテーションを義務付けた。
- ③学生の国際交流への関心を引き出し、またその土台作りをするために英語学習の同好会を作って、実践的な英語力の向上の場を提供した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

大学院生、学生たちは、外国との接点をより身近に感じるようになり、積極的に短期留学などの可能性を相談しに来る学生が増えた。また、協定校からの学生を受け入れる際には、多くの大学院生、学生がセミナーや歓迎会等に参加して、積極的に話しかけるなど、貴重な機会を活かしていた。このようなイベントを契機として、より積極的に英語の学習に取り組む大学院生も現れ、何人もの学生がTOEICの高得点を得るまで成長した。